

## 審査の結果の要旨

氏名 李晋琦

日本の路地と中国の里弄は、各々の国で多くの文献に取り上げられ、概ね懐かしい風景とされている。また、路地探訪の書籍には中国の里弄も含めてアジアの路地を併せて紹介するものも見られる。路地と里弄、さらには様々なアジアの路地的な道は共通のものとして捉えられる可能性があるが、実際に異なる国の人びとが互いに類似のものとして捉えるかどうかは検証されていない。

建築学の分野では、日本の路地は建築計画学において早くから注目され、路地における安心感ある近隣社会の形成と路地・住戸間の空間構成との関係について先駆的な研究が行われ、集合住宅への応用が検討されてきた。一方中国においては、里弄の建物を歴史的建築として修復あるいは復元・保存し、商業開発や観光開発に利用するための研究が盛んに行われている。これらはいずれもノスタルジーの感覚が根底にあるものと思われるが、両国においてこのノスタルジーの感覚が共通しているのかどうかについても検証されていない。

本論文「日中路地空間の比較研究－東京の路地と揚子江南部地域の里弄を例に」は、日中の路地/里弄景観の物理的構成の違いを分析した上で、上記の識別の共通性とノスタルジー（本論では「懐かしさ」）を含む心理的類似性との2側面から日中の路地/里弄の国際的比較の課題に精力的に取り組んだ成果である。

具体的には、下町を中心に路地が残り多くの研究が行われた東京と、里弄と呼ばれる路地的空間の発達した上海を含み、その周辺都市にそれぞれ特色ある里弄の分布が見られる揚子江南部地域とを対象に、道景観のフィールド調査を行い、採取した写真を用いて①路地/里弄の景観の物理的構成の異同を分析、②写真を用いたアンケート調査で日中両国の人に路地/里弄の景観の識別と印象評価を問い、これまで曖昧であった路地/里弄の互いの位置づけを明確にしている。

本論は、序と結および後述の3章からなる。序では、研究の背景として李晋琦氏の日中での路地/里弄での体験や都市の現状への見解が述べられ、本論の目的が①日本と中国の路地/里弄の物理的構成が異なるかどうか、②日本人と中国人は路地/里弄を識別できるか、③日本人と中国人は路地/里弄に同様な「懐かしさ」などの感情を持つか、④日本人と中国人は路地/里弄に同様に価値を感じているか、といった点を明らかにし、物理的特徴、人による識別、印象の3つの側面から路地/里弄の国際比較をすることであるとしている。

第1章ではまず、日中における路地/里弄の辞書的定義を整理し、本論の路地/里弄の範疇を検討した。次に路地/里弄研究を概観し、日本では路地の実態調査の蓄積が厚く、その中で表出やあふれ出しが定義され記録されてきたこと、中国では各里弄の歴史的発達の調査の蓄積が厚く、復古的リノベーションを巡る研究として機能していることが示唆された。第1章後半では、既往研究で扱われた各地域の歴史と主な路地/里弄が所在する場所について解説を加えている。

第2章では、第1章で概観した既往研究を根拠に路地/里弄の調査対象地域を選定し、東京10地域、揚子江南部地域8都市で写真撮影と実測とから成るフィールド調査を行った際の方法が紹介され、その物理的景観分析の結果が述べられている。分析では9870枚の道の写真から日中各130枚が抽出され、a.路地/里弄そのもの、b.路地/里弄に近いが異なる点があるもの、c.商業開発または観光開発されたもの、d.生活感のないもの、e.老朽化等で状態の悪いものの5種類に類別された。各写真の景観に占める6つの物理量（空、道、建物、緑（自然、鉢植え）、あふれ出し）の割合（可視率）を分析したところ、日中ともにa.路地/里弄そのものとb.路地/里弄に近い道との主要な違いの一つがD/Hにあること、路地/里弄ともにあふれ出しが他の類別c.d.e.より多いことなど物理的な共通点が見られた一方で、日本の路地は中国の里弄に比べて明らかに緑が多く、また揚子江南部地域の里弄の方が東京の路地よりD/Hが小さいことなどの違いが定量的に認められることを明らかにしている。

第3章では、日中各10枚の道の写真について識別・印象を7段階評価するアンケート調査をした結果（日本人82/中国人79）を検討した。道の景観が所属する国は、日中両方の人が明確に識別していた。また中国の道7枚を日本人は路地らしいとし、中国人は日本の道6枚を里弄らしいと判定した。このことから路地と里弄の定義の類似性がうかがえた。印象については、中国人は里弄と判定した日中両方の道を懐かしく感じ・雰囲気が良いとしたが、日本人は路地と判定したうち日本のもののみを懐かしく・雰囲気が良いとする傾向にあった。一方で、日中ともに雰囲気の良いものを残したいと思う傾向を明らかにした。

結では、以上の結果をまとめて、日中の路地/里弄景観の物理的構成には明確な違いがあり、かつ日中どちらに属するかの判別も明確であるにもかかわらず、両国の人々の路地/里弄らしさの判定は国を超えて共通する部分があり、また雰囲気の良いものについて残したいと感じる傾向も共通することを指摘している。

審査では記述の体系性について多くの指摘がなされ、一つひとつに対応して修正が加えられた。その結果本論文は、路地/里弄の保存を巡る計画論に有益なデータを提供し、かつ今後のアジア圏の空間語彙の国際比較分析に信頼できる基礎と手法論の一つをもたらしたとして審査委員全員の評価を得るに至った。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。